

## 「新しい開拓の芽に寛容に」

会長 末松 安晴



世界的に最高の水準にある研究成果が本学会で身近に討論されているのは誠に慶賀すべきであり、今後共、既定の概念では測られない斬新な成果が日常的に輩出するであろう。ところで、孫悟空がお釈迦様の掌中を世界として暴れているように、研究発表が既定の分野の中で行われている場合には、さして問題は起こらないであろう。しかし、孫悟空がお釈迦様の掌中から別な世界に飛び出そうとすると、そうした設定は元々ないのであるから大きな混乱を生ずる。すなわち、既定の学術的あるいは技術的な物差しが無いところで行われようとする新しい観点での研究は、判断基準が個人的価値観に依存し、客観性が失われるので問題となる。

古来、画期的な仕事は、発表当初は容易に社会、特に学会には受け入れられないものらしい。17世紀のガリレオの地動説、19世紀初頭のラマルクの進化学説の提唱、同じく、グローテフェントによる古代ペルシャ語の解説、1960年のメイマンのルビーレーザーの発振など、枚挙に暇がない。一つの新しい分野は、開拓初期においては科学技術的に誠に頼りない状態である。こうしたことを歴史的に経験し、そうした中で科学技術を作り出してきた先輩の欧米でもこのようなありさまである。それが比較的良好に整理された後で、科学技術を受け入れた我が国では、既定概念を基盤とした綿密さにかけてとなかなか受け入れられ難い雰囲気がある、新しい分野が持つ一抹のあいまいさや、泥臭さを飲み込む柔軟さに欠ける。結果として画期的な進歩を阻害することになりかねない。

本学会の今後の発展は、そうした成果にどのような姿勢で対処していくかに依存している。もし、そうした極く初期の成果が、大会で前向きに討論され、また論文誌に掲載されて、大いに迎え入れられるならば、学会は永続的な発展の力を得るであろう。しかし、そうしたものに消極的な対応をするならば学会の将来は暗くなるであろう。有力な研究は泥臭く、そして格好良くないし、学術らしくもない。残念ながら、工学自体が学術の仲間の中では同様な位置づけをされているのである。新しい研究成果や分野には、使われそうにないが、更に加わって「三無い」と見なされがちである。

新しい芽を不完全のままでも取り上げる習慣を作るためには、雑誌に載せたり、発表したりするのは、基本的には発表者本人の責任であり、評価者と発表者とが同等の立場にあることを再認識する必要がある。そして、古い文明の呪縛に損なわれない独自の価値観と評価基準を構築して、古い常識に、新しい見方の光を当てたい。世界水準をゆうに越えた光エレクトロニクスの開拓の経験は、こうして将来に向けた課題への一例示となるのではなかろうか。